

作家に語られた震災

—多和田葉子を中心に—

范 淑 文*

1. はじめに

2011年3月11日に東北地方で起きた大地震及び、それに伴った原発の災害が日本のみならず、各国でも身近な問題とされ地球レベルの大問題として扱われている。

そうした深刻な問題に向かい合うために、環境研究者が真っ先に最前線に立ち、文学創作者も負けずとばかりに何十年も先の問題を予想しながら創作に臨んでいる。例えば、川上弘美や多和田葉子など地震後、直ちに震災の惨たらしさを描いたり人類の生存問題を描いたりした作家が続出しているのがそれである。こうした流れにともない、『方丈記』などの古典から田山花袋の『東京震災記』など近代に至るまでの災害文学が新たに研究者に注目されるようになった¹。

小稿では、通称3・11東日本大震災や福島原発問題を最も深刻に描いた多和田葉子の中編小説「献灯使」²を主な考察の対象とし、この大惨事が如何に見られたかを探してみる。田山花袋ら近代作家の地震への描写を意識しながら、「献灯使」における語り手の視点、人物の設定などに注目し、語り手からのメッセージ、それらが自然や社会といかに関わっているかにアプローチしてみる。

2. 近代作家の地震描写

近代において最も規模の大きい地震と言えば、

大正12（1923）年に発生した関東大震災であることは言うまでもない。田山花袋や芥川龍之介、佐藤春夫など沢山の文学者がこの大惨事をペンで記録した。まず、田山花袋の「地震の時」という文には次のように描写されている。

私はこの二三年、廢墟といふことを非常に考へた。人間の滅びて行くさま、榮華の破壊されて行くさま、人の心の空虚に歸して行くさま、さういふことに絶えず眼を睜つた。（中略）何といふ凄じい光景だつたらう。何処を見渡しても焼け野原で吹さらしの風が灰燼を飛ばして、眼も碌に明けては通れないといふありさまだつた。（中略）何も彼も皆焼けた。（中略）東京で旨い物を食はせる店も大抵は焼けた。鰻屋も殆んど全滅だ。（中略）人間はしかしそんなに弱いものではないと私は思つた。何んな中からでも、何んな悲惨な状態の中からでも、屹度新しい芽が生えた。新しい心が萌えた。新しい恋が培はれた³。（下線部引用者、以下同様）（P365、366、368、369）

関東大震災の後、目に映った東京の風景を描いた一文である。「焼け野原」「灰燼を飛ばして」「大抵は焼けた」「全滅だ」などいずれも破壊的な表現であるが、「焼け」というイメージが大変インパクトがあったことは贅言までもない。予言程のものではないが、それらは地震が発生する一、二年前から花袋が常に意識していた「人間の滅びて行くさま、榮華の破壊されて行く」という、自然の摂理と一致している。そのような花袋

*国立台湾大学教授

の考え方に対して、小山鉄郎は「人の災害死も自然死も皆「廃墟」の一種だが、それは「大きな自然のリズムではないか」というのが花袋の震災体験考。(中略)われわれは大きな自然のリズムの中にあることへの理解。それが再生への出発点。」⁴と、関東大震災⁵から触発された花袋の人生観に言及している。つまり、中世の諸行無常の思想に相通しているという捉え方である。実際に花袋が常にそのように思っていたかは考える余地があるが、少なくとも、関東大震災の大惨事など大きな災害は一種の警鐘であり、それを契機に花袋は、世間の栄華は泡沫のように瞬時に消えたり、「灰燼」のように焼けてしまうことを改めて認識させられたのであろう。そして、そのような苦境、絶境のなかに陥っていても、「新しい芽が生えた。新しい心が萌えた。新しい恋が培はれた。」と希望を抱き、前向きな姿勢を構えることを忘れないでいるのである。

更に、関東大震災後に交蘭社が西条八十や竹久夢二、生田春月など詩人、画家の作品を編集した『噫東京』の「序に代て」には「災害そのものの絶大だつたことよりも猶太く、私等各自の小弱果敢なりしを今更に心づくと共に、過ぎし日の華かなる夢のうちばし、恐るべき呪ひの影の近づきつと有つたのを忘れて、たゞたゞ目睫の愉樂に幻惑してゐた愚さであつた。」⁶（踊り字を現代仮名遣いに直した）と、地震の規模の大きさと共に人間へ反省させる契機として災害を見なしている一節がある。また、西條八十の「大東京を弔ふ」と題した詩に「私は昨日も今日も、さびしく、／飢ゑた獣のごとく彷徨する。／ただ見る、茫乎として天空に連る褐色の焦土、ところどころ黝く、丘のごとく横はる壊れた土藏、／煉瓦壁、燻れる金庫一」⁷という一節から、上掲の花袋の描写と同じく、「焦土」「燻れる」やまた歌の後半に頻出している「焼野原」「焼死體」など、いずれも焼け跡の凄まじさに焦点を合せていることがうかがえる。

もう一人画家である竹久夢二の「死都哀唱」と

題した詩の一部を見てみよう。

5 遠き戀人

イエスともノオとも／書かないで／九月一日の朝／出した手紙が／あなたへの最後の手紙。／ゆくへもしらぬ／私は旅人。／その日のままに／あなたは遠い／生き死さへも／知るよしもなき／遠き戀人。／イエスともノオとも／いまに言ひやるすべもなく。(P68-69)

6 こほろぎ

焼野が原のこほろぎは／こほろぎは／きのふのやうに／うたへども。／焼野が原のこほろぎは／こほろぎは／きいてかなしむ／人もなし。／焼野が原のこほろぎは／こほろぎは／きのふのやうに／うたへども (P69、P70)

7 赤い地圖

見渡すかぎり赤い土。／東京地圖を／赤いインキでぬる男。／死せる都の／街角に／はてしなき青空の下に。(P70、71)

先ず、6と7番にある「焼野が原」や「赤い土」「赤いインキ」「死せる都」などの表現からも、地震による火災の破壊力に脅かされている、語り手の空しさは花袋や西条とほぼ変わらない。一方、5番には災害の風景を目の前にして、遠く離れていた恋人の消息が「その日のままに」絶えてしまった、途方に暮れている詩人の絶望も感じ取れる。

3. 『献灯使』に語られている自然と人間

さて次に、災害が史上最大規模だった3・11に目を向けてみよう。地震発生後、多和田葉子が直ちに「不死の島」という短編を発表したが、その後自らも福島を訪れ、自分の目で被災地を見た後、新たな創作に取り組んだ。それが中編小説「献灯使」であった。日本人というレッテルに対し受けたドイツでの差別を描いた短編小説「不死の島」の舞台設定とは異なり、「献灯使」は鎖国されている東京が舞台として設定され、仮設住宅で生活している百八歳になる主人公義郎と、十五歳にな

る曾孫である「無名」、または山にある施設の院長を務めている別居中の妻鞠華らの視点を通して昔のことを回想しながら、義郎と「無名」の生活振りが語られている。以下は義郎や「無名」、また鞠華の視点に焦点を据え、自然及び鎖国されている社会の様相を明らかにしてみる。

3.1 勞わりあう曾祖父と曾孫

沖縄に娘が移住し、妻も山にある施設の院長を務めていることで、東京で独り暮らしをしている主人公義郎の所にある日突然、孫の飛藻がきれいな女の子を連れて来て結婚すると告げた。その数か月後、「無名」が生まれた。その時、孫飛藻は何処か旅行中で立ち会わなかった。出産三日後、孫嫁は大量出血でこの世を去った。この孫嫁、つまり「無名」の母親は以下のように語られている。

貞操という漢字も書けず、腰が軽く、浮気が日常、責められても上の空、罪の意識はなく、うわばみみたいによく飲む女でもあった。もうとっくに灰になっているので、無名の父親が誰だったのか訊きたくても訊くことができない。(中略) 義郎は、自分と無名は遺伝子がつながっていないかもしれないのだ⁸。

(『献灯使』P120)

「無名」の出生にまつわる義郎の回想である。この回想から、貞操観念が低下しているという時代性及び、それに伴う、「無名」と自分と血のつながりのない可能性がうかがえる。にもかかわらず、義郎は引き続き、自分と「無名」のつながりについて、次のように語っている。

髪の毛を病院に送って遺伝子の検査をしてもらおうかと思ったこともあるが、(中略) 遺伝子の匂いをかぐことは誰にもできない。でも無名がいつまでも発し続けている乳児のように甘い匂いを自分にははっきりかぎとることができる。それが何より確かなメッセージだ。もし無名の母親も父親もこの匂いに酔うことができないとしたら、大自然は義郎を無名の

育ての親として選んだとみていいのではないか。(P120)

病院で遺伝子の検査をすれば、「無名」とは血縁があるかどうかははっきりするが、そのようなことを義郎は気にしなかったようである。義郎は「無名」の「甘い匂い」を「無名」の生まれた時から嗅ぎ取り続け、しかもそのことを無名の父親も母親も享受できず、それをまるで自分一人の特権であるかのように思っている。こうした状況のもとで「無名の育ての親として選」ばれたのだろうと義郎は「無名」との関係を見ている。行動の困難な「無名」が傷つかないように、服の着替えから自転車での学校の送り迎えにさり気なく気を配ったり、オレンジジュース作りなどに必死になっている義郎の姿が随所に語られる。百歳を超えても元気で死ねない義郎は、まるで「無名」の命を守っていくために生きているかのような存在である。

一方、「無名」の方もそのような義郎の気持ちを感じとっている。次の義郎と「無名」の会話に注目してみよう。

「一個しか買えなかったんだ。子供はこれからもずっと生きていかないとだめだから、なんでも子供優先だ」

と答えた。

「でも子供が死んでも大人は生きていけるけれど、大人が死んだら子供は生きていけないよ」

と歌うように無名が言い、義郎は黙り込んでしまった。(P46)

成長していくにつれ、健康状態が衰えていく曾孫の命をなんとか伸ばしていこうとする義郎の愛情を感じている「無名」は、曾祖父に自分の健康にも気を配って欲しいという。そのような「無名」の合理的な考え方に「無名たちは新しい文明を築いて残していつてくれるかもしれない。無名には生まれた時から不思議な知恵が備わっているように見える。」(P46)と義郎は考えを改めた。また、

「無名」と歯医者との会話など様々な場面で、従来固定していた価値観を、義郎は「無名」の奇抜な発想で考え直させられていくのであった。「無名」の曾祖父への思い遣りは更に続く。

無名の髪の毛の色を失い、みるみるうちに銀色に光り始めたのは三年ほど前のことだろう。無名はうっとりして鏡の中の自分を見つめながら、

「僕たち、髪の毛の色がいっしょで双子みたいだね」

と言って義郎を笑わせようとしたのに、義郎は無名を胸に抱きしめ、曾孫の髪の毛をやさしく撫でながら涙を流した。無名はあわてて、「曾おじいちゃん、僕たち二人で銀色同盟を結ぼう。この髪の毛の色が会員証のかわりだ。曾おじいちゃんだってもう五十年以上も銀色の髪の毛で元気に暮らしてきたんだから、僕だってこれから五十年以上、元気でいられるよ」

と言い放った。(P154、155)

健康状態が日に日に衰えていく⁹しるしとして色が変わっていく髪の毛の変化に悲しむどころか、「無名」はそれを笑い話のように語り、更に90歳以上年が離れている義郎に近づきたく、「銀色同盟」の結成によって義郎との関係を更に緊密にしようとしている。そのような「無名」を見て義郎は一層不憫に思った。年が遥かに離れているにもかかわらず、義郎と「無名」との絆が緊密につながれていることがうかがえよう。

3.2 身の上の変化と向き合う「無名」

そのような「無名」には実は、「献灯使」として選ばれ「これからインドのマドラスをめざして密航」させられる運命が待っている。この所謂日本脱出について、曾秋桂は「日本を脱出することによって、無名の「新しい文明を築く」(P48)ことに繋がっているという描き方は、まさに作者が日本現状に絶望した中から生まれてくる希望に

燃える打開策だと言えよう。」¹⁰と、日本脱出を「希望に燃える打開策」と見なしている。「無名の健康状態に関するデータは、医学研究を通して世界中の人々の役に立つだろうし、ひょっとしたら無名自身の命を引き延ばすこともできるかもしれない。」(P151) という世界的な視野の文脈からでは一種の希望と捉えられるだろうが、「無名」にとっては果たして「希望に燃える」人生の打開策であろうか、考える余地はある。その前に「無名」の身体の変化を描写する一節に目を向けよう。

月の戻ってきた夜、熟睡する少年たちの胸は豊かに膨らみ、膝を立てて大きく開いた両脚の間からイチジクの熟れるような香りがたちのぼった。無名も甘い香りに目を醒まし、シーツが湿っているので起きてベッドから出てみると、赤い果汁の大きなしみができていた。(P148)

「シーツが湿っている」「赤い果汁の大きなしみができていた。」という表現から、女性の生理であることは明らかである。男である「無名」が他の子と同じく、初潮を迎えたシーンである。子供たちと一緒に世界地図を見ている途中、頭痛で暫く恍惚しているなか、つまり夢か現かという状況の出来事である。が、「専門家の中には「人類はすべて女性化する」という説を唱える人と、「男の子として生まれた子が女性化し、女の子として生れた子が男性化するのだ」と説く人がいる。」(P106、107) という所謂自然のバランスを取るためのトリックを考え合せれば、この状況で起きた初潮は、「無名」の女性化への第一歩と見なせよう。

そのような自然のバランスへのトリックは終盤に近いところで更に完成した。健康状態が一層悪化して、とうとう学校で「気を失っ」てしまった「無名」が夢をみている。

熱い砂に下から暖められていく下半身に意識が辿り着いた瞬間、無名の心臓の鼓動は停止した。股の間が変化している。女性になっている。(中略) 睡蓮はまだ女性なのだろう

か。それとも男性になっているのだろうか。
(P160、161)

上掲した初潮を迎えた時点では生理の現象にとどまっていたが、ここでは生殖器にまで性的転換が及んだ。このような変化と向き合っている「無名」は側にいる隣家の少女である睡蓮の身にも変化が起こったかと気になっていた。

こうした性的転換を含め、身体の痛みや不自由、更に衰え、老いていく現実「無名」は、「泣き言を伴わない純粋な痛み」とし、「自分を可哀想だと思ふ気持ちを知らない」(P43)し、「悲観しないという能力が備わっていた。」(P150)と語られる。

とはいうものの、「献灯使」として選ばれ、送られることについては果たして希望と捉えてよいのか、ストーリーの終りの描写に注目してみよう。

人間の顔だった。左が夜那谷先生の顔、右が義郎の顔。どちらも心配そうにゆがんでいる。「僕は平気だよ、とてもいい夢を見たんだ」と言おうとしたが、舌が動かなかった。(中略) そう思っているうちに後頭部から手袋をはめて伸びてきた闇に脳味噌をゴッソりつかまれ、無名は真っ暗な海峡の深みに落ちていった。(P161)

学校で「気を失っ」た「無名」は、隣家の少女である睡蓮と砂場で会っている夢から目が覚めた描写である。眼の前に現れた夜那谷先生と義郎の心配している顔を見て、「無名」は「僕は平気だよ」と微笑んでみようとしたが、そのような表情づくりも思うとおりに行かなかった。「無名」は「真っ暗な海峡の深みに落ちていった。」という描写からでは、前途が希望に満ちたものにつながるとはとても考えられない。実はこの「献灯使」の選抜について、義郎の妻である鞠華の視点から次のように語られた箇所がある。

鞠華は、優秀な子供を選び出して使者として海外に送り出す極秘の民間プロジェクトに参加していたが、最近、審査委員の主要メン

バーに選ばれた。(中略) 無名に危険な使命は負わせたくない。このままいつまでも義郎に守られて平穏な毎日を戦い抜いてほしい。(中略) 自分さえ黙っていれば、無名は審査委員会に発見されずにすむだろうと鞠華は思っていた。(P101)

「優秀な子供」として「献灯使」に選ばれるのは名誉のことに違いない。が、審査委員の主要メンバーである鞠華は「無名」がその条件にぴったり合っていることを知りながら、審査委員たちに発見されないことをひそかに祈っていた。たとえ、それらの研究が「無名」の延命につながる可能性があるとはいえ、その前に負わされる「危険な使命」に「無名」の身が持たないと鞠華は予想していたからである。そこで「いつまでも義郎に守られて平穏な毎日を戦い抜いてほしい」と言う心境を吐露したのである。つまり、「献灯使」とは自分を含め人々の希望である前に、その灯りを捧げる一犠牲になる一存在である暗喩も託される、という両義性として捉えられよう。鞠華の案じる通り、「無名」は「真っ暗な海峡の深み」のような何かの暴力に引き摺られてしまったのである。

とはいえ、そのような宿命の持ち主である「無名」が暗闇に陥る前にみた夢を見落としてはなるまい。隣家の少女と久しぶりに海辺で会った夢である。「無名」は「銀色同盟」という仲間に入れようと、「とびきり優しい顔をつくって少女に微笑みかけてみ」たり、車椅子を転倒させて砂場に転び出た開放感を少女に勧めたりした。二人ともうまく転倒した結果、「無名」の隣に睡蓮が倒れた。「海の向うに行くことになったら、いっしょに来る？」と睡蓮に訊かれ、「睡蓮のためだけに自分の生活を捨てる覚悟をしたのだと思ってもら」いたく、「無名」はここでは実は自分も「献灯使」に選ばれたことは伏せていた。睡蓮の誘いと「無名」の返事の態度は明らかに互いに慕い合う姿勢である。その表現は更に続く。

睡蓮はまだ女性なのだろうか。それとも男性

になっているのだろうか。(中略) 睡蓮の唇をもっとよく見ようと上半身を起こそうとしたが、身体が砂に引き留められて動かない。(中略) 睡蓮の上半身が垂直に起きたのが見えた。その顔が無名の空を覆った。(P160、161)

「無名」が女性に転換したと気づいた後の描写である。十五歳の少年一少女一が性に目覚めた場面、互いに惹かれる場面である。それは相手が自分と異なる性別であろうか、問われない、という時代に生きている少年一少女一の初々しい恋であった。痛みも苦しきも悲しみも、人生に起きるすべてのことを受け入れてきた「無名」は暗い深淵に陥る前に恋をすることを忘れずにいたのだった。

4. おわりに

数えてみれば、2011年3月11日に起きた東日本大地震は1923年(大正12年)に起きた関東大震災から88年隔たっている。この百年に近い歳月は、東日本大地震の際に自然の破壊力の怖さもさることながら、人類の近代文明がもたらした二重災害という未曾有の驚異(放射線災害)をももたらした。この驚異は現場にとどまらず、日本全国、海外、更に何十年もの後の世にもその波紋を及ぼしている。上記の考察では、まず、関東大震災への文学者の目は地震直後の悍まじさに集中している傾向が見られる。一方、3・11による災害を多和田葉子は地震発生後の状況描写よりも、未来の予想を通して文明からの被害を訴えていると言える。

地震被害の状況は異なるが、例えば、村上春樹の神戸大震災への扱い方について、小山鉄郎は、「おそらく自己解体とその再編成への村上春樹の思考が反映されているのではないかと思う。」¹¹と、短編作品「かえるくん、東京を救う」のモチーフについて、更なる個への凝視と捉えている。そのような村上春樹の地震災害の作品内への反映を念頭におきながら、多和田葉子の「献灯使」に語られていることを纏めると以下ようになる。

・破壊された自然の秩序→社会構造の再構築
 原発の影響で東京は静かな町、鎖国された町に変わった。仮設住宅で生活している百歳を超えてもなお元気な老人と成人になる前に日に日に衰えていく少年の生活振りの描写を通して、破壊された自然—性別の転換という異変した自然の摂理—の秩序が語られ、それによって百歳を超えた老人と子供との共同生活が社会構造の主流になる。一方、それら身体に異変が起こった子供たちの身には、そのような苦痛や宿命を受け入れる、諦観と言うような姿勢が見られる。そのような子供の考え方や発想に促され、それまで根ざしていた従来の価値観を老人が考え直すように物語を発展させたのも新たな自然への対応姿勢だと捉えられよう。

・儂い命にも「性的な」愛を憧れる
 儂い命の持ち主「無名」にも気になる相手と慕い合い、「性的な」愛を憧れる一面が隠せない。その時代には異性であるかどうかということは問われない。それも社会秩序の変異の一端と見なすことができよう。

今回は多和田葉子の「献灯使」という中編小説を中心に考察して、作品に語られている問題点と自然や社会にどうかかわっていったかについて考えてみたが、他の短編や川上弘美の「神様2011」など他の作家の災害への語りをも考察の射程に入れるべきであろうが、今後の課題とする。

注

- 1 例えば、葛綿正一は東日本大震災をきっかけに、古典に言及されている場所、自然に注目し、「馬琴の小説は悪を懲らしめるだけの力を持つことが出来るのである。それは自然という暴力であり、馬琴小説のいたるところに善悪の彼岸が露出している。馬琴の作品では災害を契機として物語が始動する。」「震災後、もっとも再評価されるべき古典研究は益田勝実『火山列島の思想』(筑摩書房、一九六八年)である。」と、貞観の大地震(貞観11(869)年)の記述に対して新たな捉え方を成している。葛綿正一(2013)「自然とテキスト——震災

- 後の読み直し——』『日本文学』V62.No.5、〈特集・環境としての自然・風土〉、日本文学協会、P61
- 2 2017年8月に出版した『献灯使』には地震が発生して以来続々と発表した「不死の島」「動物たちのバベル」「彼岸」「韋駄天どこまでも」などの短編及び中編「献灯使」が収録されている。小稿では中編の「献灯使」を主な考察のテキストとする。
- 3 田山花袋（1995.3）『定本 田山花袋全集』第23巻、株式会社臨川書店
- 4 小山鉄郎（2015.11）「田山花袋の『東京震災記』『百夜』『大変を生きる——日本の災害と文学』株式会社作品社、P122
- 5 『定本 花袋全集』に収録されている「地震の時」の一文は時間的からも内容からも小山鉄郎が言及している「東京震災記」と同一のものの可能性が高い。
- 6 本稿の引用は、1923年12月12日に出た5版『噫東京』を復刻した『コレクション・モダン都市文化 第26巻 関東大震災』（監修：和田博文、2007.6、株式会社ゆまに書房）である。P9（頁数は復刻版に従う。）
- 7 同上注、P21
- 8 多和田葉子（2017.8）『献灯使』、株式会社講談社（以下同様）
- 9 無名は小学生の頃は少しなら自分の脚で歩くこともできたが、成長するにつれて脚を動かすのが難しくなり、長く立っていることさえできなくなってしまった。十五歳の自分は歩けないんだな、と改めて認識したが、それほど驚かなかった。P149
- 10 曾秋桂（2016.6）「エコクリティシズムから読むポスト311文学作品—多和田葉子『献灯使』を中心に—」『台湾日本語文学報』39期、台湾日本語文学会、P12
- 11 小山鉄郎（2015.11）「巨大地震を阻止した、かえるくんの「ぼく」と「非ぼく」——村上春樹」『大変を生きる——日本の災害と文学』、株式会社作品社、P67

参考文献

- 田山花袋（1995.3）『定本 田山花袋全集』第23巻、株式会社臨川書店
- 多和田葉子（2017.8）『献灯使』、株式会社講談社
- 和田博文監修（2007.6）『コレクション・モダン都市文化 第26巻 関東大震災』株式会社ゆまに書房
- 葛綿正一（2013）「自然とテキスト——震災後の読み直し——」『日本文学』V62.No.5、〈特集・環境としての自然・風土〉、日本文学協会
- 小山鉄郎（2015.11）『大変を生きる——日本の災害と文学』株式会社作品社
- 曾秋桂（2016.6）「エコクリティシズムから読むボス